

令和六年度入学者選抜試験問題 国語

注意 1 解答は、答案用紙の指定欄に記入しなさい。

- 2 受験番号を答案用紙その一、その二の指定欄に記入しなさい。
- 3 開始の指示があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 4 この問題冊子は、10ページまであります。問題冊子・答案用紙の印刷の不鮮明、ページの落丁・乱丁等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 この問題冊子は、試験終了後持ち帰ってください。

— 次の文章を読んで、あとの間に答えなさい。

私は長く歌を作ってきたが、歌を作り始めた人が、まず必死に努力し、そしてそれがうまく行かなくてアせる^aのは、自分の思いをいかに言葉にして伝えるかということである。思っていることがうまく表現できません、あの感動がどうにも言葉にできません。もっと熱い思いがあるのですが、まだ言葉が足りません。こんなナゲ^bきを多く聞かされる。

初心者がまず躓^{つまず}くのは、自分の思いを形容詞に置き換えて表現してしまうところであろう。美しい光景を目にすれば、美しいという言葉を使いたくなる。悲しい場面に遭遇^cすれば、悲しいという言葉しか思い浮かばない。しかし、短歌に限らず、言語表現としての芸術活動でもっとも大切なことは、形容詞で自分の思いを表現したような気にならないことである。

① 形容詞は常に最大公約数であり、誰もが一樣に理解できる代わりに、その言葉を使った人の個別の感情については一切の情報を与えることを放棄するものに他ならない。「悲しい」と表現すれば、作者が悲しいことは理解できるが、「どのように」悲しいのかは一切わからないのである。その「どのように」という個性のなかにのみ、言語表現の要諦がある。

私は新聞をはじめ多くの場で選歌をしてきたが、採^dれない歌の大半は、結句で作者の感情を言い過ぎている場合である。これを（結句病）などとも言っているが、どうしても作者は結句の七音で、自分の感情に落とし前をつけたくなるものらしい。あるいは、自分の思いをわかってほしいという感情にさからえず、つい自分の思いを過剰に説明しようとするものであるらしい。多くの場合、そこに形容詞が顔を出す。

「わかつてよ」というのは誰もが願うところであるが、そこには、たぶんここまで念を押さなければ、読者はわかつてはくれな
いだろうという思い込みがある。② 歌にはいわば「読みのリテラシー」とでもいうべきものが、他の文芸よりは強く要求されるのであろう。わずか三十一文字という短い詩型で、作者の思いを汲み取るには、ある程度読みの訓練ができていないとむずかしいところがある。初心者は、自分が読めないと、当然人も分かってくれないだろうと思って、説明過多になり、なんら面白くない作品になってしまうのである。

私が常に言い続けているのは、自分のいちばん言いたいところは言わないでおくという覚悟である。ここだけはわかって欲しいというところを、敢えて言わないで、それは読者に預ける、感じとって欲しいとするところに短詩型の詩を為す意味があると思っている。言いたい部分を言わないことによって、読者のなかでいかに自分の思いが、自分の思っている以上の広がりや興行^{きぎやう}きを獲得するか。そこに賭けるのが作歌の醍醐^{だいご}味であり、意味であると思っている。

母を知らぬわれに母無き五十年湖に降る雪ふりながら消ゆ

永田和宏『百万遍^{まいびん}界限』

私の母は私が三歳の時に亡くなり、私は母の顔を知らない。私にとって母は亡くなったのではなく、初めから存在しないこと
によって母であり続けた存在なのであった。③ それが私の五十年という時間であった。この一首は、そのことしか言っていない。下句には、かすかに命の儂^{はかな}さともいったものが投影されているかもしれないが、単なる情景描写である。

しかし、作者としては、私がどんなに言葉で説明してもわかってもらえないだろう思いを、読者はおそらくこの一首から感じとってくれる筈^{はず}だという確信がある。それが表現を、ここで止めておく、抑えておくという慎重ともなり、自信ともなっているのである。

言いたいことを、その前で止めておく、抑えておいて、相手に感じ取ってもらう、そんな表現の慎重といった態度が、私たち歌人の作品の評価にはヒツス^eのものとなっている。

④ それはまた人に接するときの慎重と理解の鍵ともなる要素ではないだろうか。それを別の言葉で言えば、言葉の品と言うべきであり、その人自身の品であるのかもしれない。

（永田和宏「言葉に対する慎重」『學鏡』による）

問1 傍線部 a から e までの片仮名を漢字に、漢字を平仮名に直しなさい。

問2 傍線部①「形容詞は常に最大公約数であり、誰もが一樣に理解できる代わりに、その言葉を使った人の個別の感情については一切の情報を与えることを放棄するものに他ならない」とありますが、これはどのようなことを意味しているのか、分かりやすく説明しなさい。

問3 傍線部②「歌にはいわば「読みのリテラシー」とでもいうべきものが、他の文芸よりは強く要求されるのであろう」とありますが、筆者はなぜ、このように言うのですか。短歌の制作という観点から、説明しなさい。

問4 傍線部③「それが私の五十年という時間であった」とありますが、これはどのようなことを意味しているのか、分かりやすく説明しなさい。

問5 傍線部④「それはまた人に接するときの慎みと理解の鍵ともなる要素ではないだろうか」とありますが、これはどのようなことを意味しているのか、分かりやすく説明しなさい。

二 次の文章は、『平中物語』の一節です。文中の「この男」が通っていた女のところに、身分の高い男が通うようになり、あまりの身分差に女と疎遠になっていましたが、再び女のもとを訪ねてみるという場面です。これを読んで、あとの間に答えなさい。

この男、時々行くところありけるに、ほのぼのと明るるほどにぞ、帰りける。この、かういふ女の家のあたりより行きけるに、「里へ」と言ひしはまことかとて、ものの気色も見むと、思ひはなたで、門のうちの方に、車など引き立てて、この品高き男の供なる男どもなど、あまた立てりけり。そのかみ、もの言はで、奥にはひ入りて、隠れ立ちて、見れば、女、薙しよみ押し上げて、かの高き人をぞ出だしける。この男、かう、うつつに見つることの心憂きことと思ひて、よに知らず心憂かりけれど、もの一言をだに言はむ、さても、はた、見けりとこそ思はれめとて、板敷の端に立ち寄りて、声高く、「あな、おもしろの花や」と言へば、この女、奥へも入りはてざりければ、あやしがりて、さしのぞきたり。見合はせて、「いかでかは、ここに、かうは」と言へば、「この前栽せんざいの花の、目に見す見すうつろふ、見はてになむ、まゐり来つる」とぞ言ひける。その家の前に、桜のいとおもしろく咲きて、春のはてがたにやありけむ、散りけり。それを見て、男、

⑥ あらはなることあらがふな桜花春をかざりと散るは見えつつ

と言ひて、ふと出でて行きければ、「えこそ。しばしや」と言ひけれど、いとかう憂しと思ひて、止まらざりければ、しひてかくなむ。

⑦ 色に出でてあだに見ゆとも桜花風し吹かずは散らじとぞ思ふ

と言へりけれど、「ものへ出でぬ」^⑧とて、返り言もせざりけり。

(『平中物語』より)

注 女の家のあたりより—女の家のあたりに。 里へ—実家へ(帰った)。二人は身分の高い男のことでもめて、女は実家に帰るとこの男に告げていた。 思ひはなたで—思いが離れないで。そうして邸内を見ると。 そのかみ、もの言はで—その時、男は訪問したという取り次ぎもさせないで。 奥にはひ入りて—庭の奥の方に入つて。 薙—室内と外をつなぐ格子戸。 目に見す見す—はっきりと目に見えて。 春のはてがた—春の終わり頃。二人の仲を連想させる。 ふと—さっと。 えこそ—そんなこと(できません)。気が動転して「えこそさはあらじ」を最後まで言えていない。 ものへ—よそへ。

問 6 傍線部①「うつつに見つることの心憂きことと思ひて」、傍線部②「もの一言をだに言はむ」を現代語に訳しなさい。

問 7 傍線部③「め」、傍線部⑤「けむ」、傍線部⑧「ぬ」を文法的に説明しなさい。

問 8 傍線部④「いかでかは、ここに」とありますが、このように問われて男はどう答えましたか、現代語で説明しなさい。

問 9 傍線部⑥「あらはなることあらがふな」とありますが、男はどのようなことを言おうとしていますか、説明しなさい。

問 10 傍線部⑦「桜花風し吹かずは散らじとぞ思ふ」の「風」は身分の高い男を指しています。傍線部⑦で、女はどのようなことを言おうとしていますか、「風」の指しているものをふまえ説明しなさい。

三

次の文章は、『聊齋志異』橋樹の一節です。陝西の劉公が興化県(江蘇省)の知事をしていた時、女の誕生日に一人の道士が橋の盆栽を献上してきた。その橋があまりに貧弱であったので、劉公はいつたん断つたが、道士が是非にと言うので、それを受け取ることにした。以下の文章は、劉公がその橋の盆栽を女に手渡してからのものです。これを読んで、あとの問に答えなさい。なお、設問の都合で、返り点・送り仮名を省略した部分があります。

女一見、不勝^a愛悦、眞諸閨闈、朝夕護^{リテ}之唯恐^ル傷。劉任

滿、橋盈把^ニ矣。是年初結^①実。簡装將行、以橋重贅、謀棄之。女

抱^{キテ}樹嬌啼。家人給^レ之曰、暫去、且將復^b来。女信^レ之、涕始止。又

恐^レ為^ニ大力者負^レ之而去^上。立視^ニ家人、移^ニ栽墀下、乃^c行^ク。

女婦、受^ニ莊氏聘。莊丙戌登^ニ進士、積^レ褐為^ニ興化令。夫人大

喜。窃^ヒ意^ニ三十余年、橋不^ニ復存。及^レ至則橋已^ニ十圉、実^ハ纍^ル纍、以^レ千

計。問^ニ之故役、皆云、劉公去後、橋甚茂而不^レ実、此其初結^也。

更^ニ奇^{トス}之。莊任三年、繁実不^レ懈^④、第四年、憔悴無^ニ少華。夫人曰、

君任^ノ此不^レ久矣。至^{リテ}秋、果解^レ。

〔聊齋志異』橋樹による〕

注 閨闈—女性の寝室。 把—両手で握るほどの大きさ。 簡装—ここでは引越しの支度を調えること。 重贅—重くて処置に困るもの。「贅」は余分なもの。 嬌啼—駄々をこねて泣く。 墀—庭から屋内に上がるための階段。 婦—嫁にゆく。 聘—男性が女性に結納の品を納めて正式に妻とすること。 丙戌—ひのえいぬ。 清の順治三年(一六四六)のことか。 進士—科挙試験でもっとも難しいとされる科目。 褐—粗末な服。 令—県の知事。 圉—かかえ。 一圉は両手を広げてひとかこみする大きさ。 纍纍—物が重なり合うさま。 ここでは、数多く実るさま。 故役—古くからの役人。 ここでは、父親の代からその土地で仕えている下役人のこと。

問11 傍線部 a 「不勝」、b「復」、c「乃」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記しなさい。

問12 傍線部①は「さうをえらびてまさにゆかんとし、きつのぢゆうぜいなるをもつて、これをすてんことをはかる」と書き下します。これに従って返り点と送り仮名を加えなさい。なお、「簡」は「えら(ぶ)」と読みます。

問13 傍線部②をすべて平仮名で書き下し文にし、現代語に訳しなさい。

問14 傍線部③「更^ニ奇^{トス}之」とはどういうことですか、劉公の女が「奇」とした内容を具体的に示しながら説明しなさい。

問15 傍線部④「第四年、憔悴^{シテ}無^シ少^シ華」を状況が分かるように言葉を補いながら現代語に訳しなさい。

問16 にあてはまる漢字を次の中から一つ選びなさい。

「実」「結」「褐」「任」「聘」

令和六年度入学者選抜試験答案用紙 国語その一

問 5	問 4	問 3	問 2	問 1	
				d	a
				e	b
					c

受 験 番 号

小 計 1

問 10	問 9	問 8	問 7	問 6
			③	①
			⑤	
				②
			⑧	

小計 2

問 16	問 15	問 14	問 13		問 12	問 11
			(現代語訳)	(書き下し文)	簡装将行、以橘重贅、謀棄之。	a
						b
						c

小計 3

受験番号